

【徒然】

アルケミーというものも、当初の予定では「簡単なものから難しいものへ」を考えていたし、「具体的なものから抽象的な物へ」を考えていたのだけど、1年やってみて、なかなかうまくいかないなと実感した。どうしてもその時話したいことを話してしまうので、抽象度にきれいなグラデーションも出ないし、難易度にも同様のことが言える。コンテンツは完全に受け手の好き嫌いに任される形になり、僕自身がずっと言ってるような、現代っぽいと言えば現代っぽいんだけど、どうせならもっと「カッコよく」できないもんかとは、ちょっと思う。まあ、お前なんてその程度だと言われればそれまでなのだけど、そして上がまだまだあると考えればいいじゃないと言われればその通りなんだけど。

セミナーで具体的かつ比較的平易な話をすると、どこか物足りなさを感じる。抽象的かつ難解な話をすると、伝わっているかが不安になる。その間で揺らぎ、葛藤し、そんな1年だった。なんちゃらマスタークラスという名がついた講座と比較して、数十倍の人が受けてくれているアルケミーという講座の難しさをよおしく実感した一年だった。いろんな人がいて、そのいろんな人には特定の興味や感性があって、さまざまな知的水準があって、それをひとつのセミナーやレポートで満足させなくてはいけない難しさ。欲張らなければいいのかもしれないけど、やるからには、できる限りのものを創りたいわけで。そんなこんなで、次の一年、もっとうまいことセミナーができるようになればいいな、みたいな。

【セミナー】

僕のセミナーは、何か答えを教えるタイプの、一般に求められやすいタイプの、インスタントなお薬を与えるタイプのものではない。「人びとは薬をほしがっている」とセミナーでは言いつつ、自分は真逆のものを提供している。もちろん一長一短ある。多くの人からはそっぽを向かれ、人を選び、何やら小難しいことを言っている人、というレッテルを貼られることになる一方で、意識の高い人だけが集まり、僕自身成長させてもらえ、それ以上に受講生の成長や変化をアリーナ席で目の当たりにすることができる。

こんなアルケミーの現状を踏まえ、「基礎講座」などという名前のもも始めたが、開始2回目ですでに「基礎ってなんだっけ」という状態になりつつあり、いかんなあと思いつつも、どうしても自分の欲求とか信念に逆らうことができず、普段は「バランスが大事なんですよ」とかしたり顔で語っているのに、肝心のお前は、的ない突っ込みを自分で入れる毎日。個人的には基礎の部分を語っているつもりなのだけど、基礎にしては本格的です

よねという趣旨のコメントもいくつかもらい、僕が考える基礎の水準がおかしいのかなどと1秒くらい揺らぐのだけど、結局すぐ忘れてたり。

メルマガなどでも書いているが、僕は元来ネガティブな方で、セミナーが終わった直後やレポートを配布した直後は、メールボックスを確認するのが、いまだに怖かったりする。別にひどいセミナーだったなと思うことはないのだが、それでも何も学びを与えられていなかったらどうしよう、という不安があり、メールが来るのが怖くなるわけだ。感想メールがくるとすると大体はおほめの言葉を頂戴できるわけだけど、そんな状況が10年近く続いた今でも、やっぱり直後は怖いものだ。

【目指すもの】

スティーブジョブズやオバマのプレゼンは確かにうまいと思う。世の中の「先生」と呼ばれる人は一度は研究すべき人物だと思うけど、だけど、セミナーや授業はプレゼンではない。商品を紹介するわけではないから。プレゼンとは、究極的には「薬」の販売である。ものすごい感じの悪い言葉を使えば、良いプレゼンは、オーディエンスがバカであるという前提で構築されたものだし、売れるセールスも同様である。Not Read という概念を数年前に紹介したが、最近では、アレは (Can) not read という意味だったのだと思う。そういう前提でやれ、と。ドライに考えれば間違いではない。でもドライに考えるのは残念ながら苦手。

セミナーや授業で薬を売ったら、僕はその人はもはや教師ですらないと思うし、キルケゴールは「友ですらない」と言ったけど、その意味で、やっぱりジョブズやオバマを追いかけたいはいけないのだと思う。薬は、自分の力で何とかすることをあきらめた人に売るものであって、その人の力を伸ばすために売るものでは決してないから。風邪薬を飲めば飲むほど、その人の免疫力は弱体化していくのと同じ理屈。ジョブズはアップルの製品が世界を変えようと思っているし、よりよくすると思っているし、人間のクリエイティビティすら伸ばすと信じている。でも僕は逆だと信じている。アレは薬だもの。もちろんアップルだけじゃないけど。その意味で、模範となるような授業ができる教師というのは、世界中探しても、ほとんど見当たらない気がする。奢っているわけではなく、単純にそう思う。

たとえばアンソニーロビンスの情熱やメッセージを伝える力はすごいと思うが、アレはグルであって、やはり教師ではない。アメリカの大学の先生は、人気が出れば出るほど、なんとなく、僕の理想からは遠くなっていってしまう。日本の先生では、そもそも皆無であ

ることは、言うまでもない。「人間として」優れた人には幸いにして何人も出会うことができたが、「教師として」優秀な人には、思わず圧倒されるような人には、残念ながら出会えなかった。元々予備校の先生の授業に感動して教育の道に入ったが、予備校の講師をして2年が終わった時に、その世界の限界を見た気がした。それが僕の勘違いや思い上がりであったなら、むしろうれしい。通っている生徒たちには、その方がいいだろうから。今の僕が予備校の授業を受けてみたら、どう感じるのか少し興味があったりなかったり。

模範不在の中で上を目指す、努力するというのは、語義矛盾にも等しいくらい難しい。100メートル走を、一人で走ると、同じくらいのタイムの人と一緒に走るとでは、後者のタイムが絶対的によくなるのと同じで、目標があると、人間は短期的には実力を発揮しやすい。誰を目指すでもない。どんな授業が最良なのかもわからない。そんな中で最良を目指すわけだから、悩ましいことこの上ないけど、どこかで、目標とかがあったらつまらないと思っているような気もする。

【一流のモノサシ】

何かの一流になるには、1万時間必要というのが基準になっているらしいということ、昔何かで読んだことがある。結構有名な話らしい。ところで自分はどうかのだろうと、少し計算してみる。予備校の講師を3年半やったとして、1年間で350日くらいは授業をしていて、そのうち少なく見積もっても280日は1日5時間、70日は1日10時間くらいはやっていた。となると1年間で1400時間+700時間=2100時間。それが3年半で7350時間。講師1年目で全校舎で一番授業に入ったと言われたのは伊達じゃないっ！労働基準法と違って、最近できたんだっけ。

朝から夕方は大学、夕方から夜は予備校、夜から深夜は予備校の授業の準備、深夜から朝は大学の課題や自分の勉強。食事は1日1食で十分だったし、睡眠は、細切れにしてたからよくわからないけど、たぶん1日3時間くらい。その時わかったのは、人間って、案外頑丈にできているってこと。実は、このことは本当に大きな発見だった。限界って、死ぬほど頑張ったくらいじゃ、超えれない。「あなたの寿命は、このままの生活を続けるなら、あと2年」と大学2年の頭に病院で断言されたことが懐かしい。

それから約4年間、ビジネスの世界でセミナーを何度もやらせてもらっているが、コンサルや面談を入れないとしたら、おそらくなんだかんだで平均にならしてしまえば月に15時間くらいはやっていたような気がする。年間に直せば $15 \times 12 = 180$ 時間。それが4年で $180 \times 4 = 720$ 時間。つまり、ざっくり計算すると、のべで8070時間、人

前に立って何かを伝えてきたことになる。予備校時代が異常だったという気もしなくはないけど、なにせよ、もうすぐ1万時間じゃないの、と試してみたり。

ちょっとインプットを増やしたいから、多少ゆっくりするとして、35歳くらいまでには1万時間試してみたいな—いったら何か変わるのかな—と少しだけ思っていることは秘密。というか35歳まで生きているのかどうか。昔から「木坂さんは超早死にか超長生きだと思います」といろんな人に言われたが、大きなお世話以外の何物でもないな、今思うと。たまにはこうやって数字で試してみるのも、新鮮でいい。

というかいつから僕はセミナー講師になったのか。もともと文章で食っていきかけた気がするんだが。感覚だけど、文章はもう1万時間以上書いている気がする。でもまだ全然下手なのは、1万時間理論が間違っているからか、人一倍センスがないからか。前者だったらいいなと思う弱い心を今年はず何とかなしたい。

ま、これからもまた楽しみがたくさんあるらしいことはよくわかったから、それでよしとした夏の夕暮れ。

アルケミー1期、とても楽しかったです。

多謝。

木坂